

読解力練習帖 (3)

三上 勝夫

このシリーズは、読解力練習帖 (1)『北海道文教大学論集』No.23, 同 (2)『こども学の探究』No.3 (北海道文教大学こども発達学科紀要) の続きです。第Ⅰ部「厳しく批判する」を終了し、今回からは、第Ⅱ部「豊かに受容する」に入ります。主として小学校の教科書に載っている物語文をテキストとします。文学作品の豊かな読み取りが、ことばと論理を鍛える主戦場なのだということも示したいと思います。

第Ⅱ部 豊かに受容する

問題5

予告通り、「一つの花」(今西裕行)を取り上げます。

テキストは「旧作」とします。今回は作品の本体部分です。前問でのエピローグと合わせれば、みなさんは作品全体を手に入れたこととなりますので、トータルに活用していただくことができます。

本来なら、この作品の良さをいろいろ指摘してもらいたいところですが、まずは、しばって、

「一つだけのお花 (だいじにすんだよ)」

が、表現しているであろう意味をできるだけたくさん (多様に) 挙げてみてください、というのが課題です。その中でも、みなさんならどれが一番妥当な解釈だと思いますか。そこが聞きたいです。

テキスト

一つの花

今西 裕行

「一つだけちょうだい。」

これが、ユミ子の、はじめてはっきりおぼえたことばでした。

まだ、戦争のはげしかったころです。たべるものといえば、お米のかわりに、いもや、まめや、カボチャしか、はいきゅうになりませんでした。

まい日、敵の飛行機がやってきて、町を、つぎつぎに、くうしゅうし、はいにしていきました。

ユミ子は、いつも、おなかをすかしていたのでしょうか。ごはんのときでも、おやつするときでも、もっと、もっと、と、いって、いくらでも、ほしがるのでした。

すると、ユミ子のおかあさんは、

「じゃあね、一つだけよ。」

と、いって、じぶんの分から、一つ、ユミ子にわけてくれるのでした。

「一つだけ……。一つだけ……。」

と、しらずしらずのうちに、これが、おかあさんの口ぐせになってしまいました。ユミ子は、それをおぼえてしまったのです。

「なんて、かわいそうな子でしょうね。一つだけちょうだいといえば、なんでも、もらえとおもっているのね。」

あるとき、おかあさんがいいました。

すると、おとうさんは、ふかいためいきをついて、いいました。

「この子は、いっしょう、みんなちょうだい、山ほどこちょうだいといって、両手をだすことを、しらずにすすかもしれないね。一つだけのいも、一つだけのにぎりめし、一つだけのカボチャのにつけ……。みんな一つだけのよろこびさ。いや、よろこびなんて、一つだって、もらえないかもしれない。いったい、大きくなって、どんな子に、そだつんだらう。」

そんなとき、おとうさんは、きまって、ユミ子をめちゃくちゃに「たかいたかい」をするのでした。

それからまもなく、あまりじょうぶでないユミ子のおとうさんも、戦争にいかなければならない日がやってきました。

おとうさんが、戦争に行く日、ユミ子はおかあさんにおぶわれて、とおい汽車の駅まで、おくつていきました。あたまには、おかあさんのつくってくれた、わたいの、ぼうくうずきんをかぶっていました。

おかあさんのかたにかかっているカバンには、ほうたい、おくすり、はいきゅうのキップ、そして、だいじなお米でつくったおにぎりがはいていました。ユミ子は、おにぎりがはいているのを、ちゃあんとしていましたので、

「一つだけちょうだい。一つだけちょうだい。」

といって、駅につくまでに、みんなたべてしまいました。おかあさんは、戦争に行くおとうさんに、ユミ子のなき顔をみせたくなかったのでしょうか。

駅には、ほかに、戦争に行く人があって、人ごみのなかから、ときどき、バンザイがおこりました。また、べつのほうからは、たえず、いさましい軍歌がきこえてきました。みおくりのないおとうさんは、プラットホームのはしのほうで、ユミ子をだいて、そんな声にあわせて、ちいさく、バンザイをしたり、歌をうたったりしていました。まるで、戦争に行く人ではないように。

ところが、いよいよ、汽車がやってくるというときになって、また、ユミ子の「一つだけちょうだい。」が、はじまったのです。

「みんなおやりよ、かあさん。おにぎりを……。」

おとうさんがいいました。

「ええ、もう、たべちゃったんですの……。ユミちゃん、いいわねえ、おとうちゃん、へいたいちゃんよ、バンザイって……。」

おかあさんは、そういつて、ユミ子をあやしました。それでも、ユミ子は、とうとうなきだしてしまいました。

「一つだけ、一つだけ……。」

といつて。

すると、おとうさんは、ふいと、いなくなりました。

おとうさんはプラットホームのはしっぽの、ごみすて場のようなところに、わすれられたようにさいていたコスモスの花をみつけたのです。あわててかえってきたおとうさんの手には、一りんのコスモスの花がありました。

「ユミ、さあ、一つだけあげよう。一つだけのお花、だいじにするんだよ。」

ユミ子はおとうさんに花をもらおうと、キャッキョッと、足をばたつかせてよろこびました。

おとうさんは、それをみて、にっこりわらうと、なにもいわずに、汽車にのって行ってしまいました。

アドバイス

いかがですか。いくつくらい考えられましたか。わたしは、大ざっぱに言って、3類型はあると思っています。

①一つ目は、素直に、字義どおり（文字どおり）に受け取ってはどうか。

②二つ目は、「花（コスモス）」にこだわって、この花の象徴性を考えてみるというのも自然な受け取りだと思います。別れに際して大事にしないでと言っているわけですから、読み手としては、何かメッセージがこめられていると考えますよね。

③三つ目は、それにしても「一つだけのお花」と言って、「一つだけ」を強調しているのにも理由があると詮索したくなりませんか。ここに注目することもありかと思います。

さあ、どんな解釈が生まれるでしょうか。

解説

①について

おとうさんは、「一つだけ」と言って泣くユミ子をなだめたいのです。きれいだけれども、食べものではないコスモスで大丈夫か。半信半疑だったでしょう。手渡すときに、ふと、これが自分を思い出す「よすが」になってくれればと、都合よく思いついたのかもしれませんが。思わず「だいじにするんだよ。」と口に出してしまいました。さいわいユミは大喜びしてくれました。で、なにも言わずに、汽車に乗りました。（母娘ともども生き延びてほしい。自分もかならず帰ってくる。いわずもがなのことばを胸の内に納めて。無言で……）

小学校4年の授業での取り扱いであれば、このような文字どおりの読みで十分だと思います。国語の授業らしく「形見」ということばを子どもの語彙に加えてあげるのもいいかもしれません。

いろいろ議論したあとで、

「おとうさんは、ユミ子を泣きやませようと思ってコスモスの花をあげた。その時、これが「形見」になるかなと思ったのではないか。だから「だいじにするんだよ」と言ったのではないかな。」

などという確認ができれば、十分に読みとれたといえるのではないのでしょうか。

次のような会話が交わされればなおうれしいですね。

—おとうさん、コスモスいっぱい持ってくればもっとよかったのに。だってユミ子が「一つだけ」ってねだるの心配してたでしょ。

—そうだよ。一輪だけでなく。

—でもいままユミ子が「一つだけって」泣いてるからじゃない？

—そうだね。いいところに気がついたね。先生には先生の考えがあるけど。これは、高校生くらいになって、読む力がグンと付いた頃に、もう一度考えてみたらいいと思うよ。

—それに、「だいじに」っていうけど、そのコスモスはしぼんじゃうんだよね。種、買ってきて蒔けばいいのかな。

—それ、次に出てくるよね。

授業の役目は、わかることはしっかりとわかってもらう。あわせて、たくさんの問いを抱かせてあげること。これに尽きると思います。

②について

成熟した読み手ならば①の段階の解釈では満足できないと思います。文学のことが象徴性に豊んでいることを経験しているからです。文学における「象徴」という用語は多義的でやっかいですので、後ほど整理しましょう。

だいじにしてほしい「一つだけのお花」は、何を象徴しているのか。

手堅い考え方として「花ことば」はどうでしょうか。グーグルによるとコスモスは、「乙女の真心、調和、謙虚…」などを象徴するとして公認（コード化）されているようです。たまたま見つけた花とはいえ、花ことばにちなんで（父親がコスモスの花ことばを知っていたとするのは無理かもしれませんが）ユミ子の乙女への無事な成長という願いが託されたと解釈して納得するのもありといえます。

さらにはカオス（混沌）との対で用いられるコスモス（秩序）を想起し、戦時中というコンテキストに重ねて、平和への希求と読むこともあながち間違いとはいえないでしょう。

このように、あまりに通常コードに傾いた解釈をよしとしないのであれば、ごく自然に、コスモスの花の連想としての清らかさ美しさに心のやすらぎを得てほしいと父親は願ったと解釈するのもよいかと思います。文芸教育の西郷竹彦先生からも、じかにこのような趣旨のお話をうかがったことがありました。

だいじにしたくても、花はしぼんでしまうという難点（というよりも作品のしかけ）は、このように抽象的なものの象徴と受け取ることで、解消できますね。

③について

おとうさんは、ユミ子が「一つだけ」といって物をねだるのを心配していました。「大きくなって、どんな子に、育つんだろう。」チョッとばかり心配しすぎだとも言えますが、戦時中という困難な状況で、おおらかな子に育つか気になったのでしょう。

なのに、なぜ、一輪だけだったのでしょうか。

ユミ子が、いま「一つだけ」といって泣いているから。まずはそうとしか解釈できません。コスモスが一輪しか咲いていなかったといううがった見方もできますが、以下の観点からは問題ではありません。

わたしが示したい観点とは、「一つだけの」という連体修飾の用法をどう見るかということです。

わき道にそれますが、少し説明します。

一般に連体修飾の用法には、制限的修飾と非制限的修飾があります。無粋ですが次の用例はどうで

しょう。

(1) 法律上、勤勉な公務員には相応の手当てが支給される。(制限的修飾)

(2) 法律上、争議の禁止されている公務員のために、人事院が給与勧告をする。(非制限的修飾)

かつてのわたしがそうであったように、勤勉でない公務員もいるかもしれません。(1)は、一定期間の勤勉な人とそうでない人を区別する(対象の範囲を制限する)用法です。(2)では、争議行為の許されている公務員などいないわけですから、範囲の制限ではなく、公務員というものの立場・特徴について、あえて説明している用法といえます。(1)は範囲を制限するための修飾、(2)は特徴をきわだたせるための修飾と定義できます。

(3) 一つだけのおにぎりじゃないよ、二つたのんだはずだよ。

(4) 一つだけの地球、子や孫のためにだいじにしなきゃね。

この例では、(3)は一応「二つのおにぎり」との対比で、制限的用法でしょう。(4)は、いうまでもなく、一つしかない地球という存在の特徴をきわだたせた用法です。固有名詞をかざる修飾はいうまでもないことですが、非制限的用法です。(この例でチョッとやっかいなのは、日本語の数量詞の使い方では「二本のダイコンをください」などとは言わず、「ダイコンを二本ください」となるので、(3)の例文には、ややギコチなさがあることです。)

話を戻します。

おとうさんは、なんと、コスモスを一輪だけもってきました。

おとうさんが好ましく思っていなかった「一つだけの(おにぎり……)」は制限的用法ですね。二つ、三つ…山ほどなどとの対比で。しかし、今このドタン場での「一つだけの(お花)」は、非制限的修飾として用いられているのではないかとわたしは思います。(そういえば、一つだけの地球(ジオンリー・ワン・アース)は国際地球年の標語としては「かけがえのない地球」と日本語訳されました。)おとうさんのここでの「一つだけのお花」は「かけがえのないお花」と言い換えても同じ意味ですね。

状況が悲しく言わせている「一つだけ」を逆手にとって、お父さんは、いまここで、かけがえのない、一つだけのお花を大事にするんだよと思いを託したのではないのでしょうか。

さて、この解釈が成り立つとすれば、「一つだけのお花」に託されたおとうさんの思い、「一つだけのお花」が象徴するものは何なののでしょうか。この、戦争中という背景に重ねれば、それは、一人ひとりの人の命としてしか考えられません。それぞれの人の命こそ「一つだけの」ものです。戦争がないがしろにし、踏みにじる人の命。ユミ子の命、おかあさんの命、そして自分の命も。それこそ大事にしたい／してほしい。おとうさんはそう願ったはずです。

言うべきことを言った。伝えるべきことを伝えた。さいわいユミ子も泣き止んだ。あとは無言で汽車に乗っていったのでした。

さて、みなさんはどの種類の読みになりましたか。もちろんこれ以外にも読みは豊かにあると思います。かくいうわたしも③のタイプの読みで、「一つだけ」の用法の変化を、今回よりもやや浅い説明で納得していた時期がありました。たったの一、二行なのに、しかけがいっぱいあり、それに応えられる解釈になっているかが問われます。なぜ一輪なのか、なぜやがてしぼむのに花なのか、なぜだいじにと言ったのか、なぜ無言で汽車に乗ったのか。まだまだ考える余地はありそうですね。

音楽は多くの場合、演奏家を介して作品を享受します。文学においては、ラジオの朗読番組、映画化、劇化などにより楽しむこともあります。本来は読者が自分で読むしかありません。読者は演奏家や演出家も兼ねるわけです。難しさもありますが、納得できる解釈が得られれば、至福の境地にひたれるかもしれませんよ。ただし、音がはずれすぎたり、テンポがくるいっぱなしだったりではいけません。亜流の「読者論」を受け売りして、なんでもありの読みが流行っているようですが、それでは読みの醍醐味は薄くなります。

補足

象徴について考えましょう。

まず、大前提です。この世のすべての「もの」や「こと」は、必ず何かを表現しています。木からリンゴが落ちた「こと」はニュートンの目には、万有引力が働いていると読みとられました。『帰らざる河』のラストシーンの地面に落ちた赤色のハイヒールという「もの」は、もちろん引力のせいでもあります。ヒロインが酒場の歌姫をやめる決心をしたこと語っています。

手紙

鈴木 敏文

ゆうびんやさんが こない日でも
あなたに とどけられる
手紙はあるのです

ゆっくり 過ぎる
雲のかげ

庭にまいおる

たんぽぽの わた毛

おなかをすかした

のらねこの声も

ごみ集めをしている人の

ひたいの汗も……

みんな 手紙なのです

読もうとさえすれば

よい詩があります。教室で取り上げる先生もいます。多分、鈴木氏が病院の窓から見た風景も一部重なっているでしょう。教室では最後の行の「読もうとさえすれば」に感心して、「みんな、読んで、読んでって言っているのかな。」と発言した子どももいました。「ひたいの汗も」の後の「……」にことよせて、「君らだったら、どんな手紙読んで欲しいかな。二行、つけ足してごらん」と、促す先生もいました。この詩はぜひ教科書に採用してもらいたいですね。流行りの記号論のテキストの冒頭におくのもいいかもしれません。

このように、存在「もの・こと」は見る側の見方によっていろいろなことを語ってくれます。もっとはっきりと確定した意味内容を伝える信号や標識といわれる「もの」もあります。古代の「のろし」は、敵の襲来を知らせる合図でしょう。車を運転していて一時停止の標識を見逃していたら大変です。難波江の濠標（みをつくし）は、水路案内が役目でしたが古代の歌枕でもあったようですね。このように意味が社会的に共有されている場合、コード化されているといえます。

十字架の印は、おおむねキリスト教に関係することを表現していると思われませんが、元をたどればイエスの磔刑がモチーフですね。ひたいの汗は、いっしょうけんめい働いている証でしょう。十字架とキリスト教、ひたいの汗と労働、このように「もの・こと」と表現されている意味内容とに関係があることを有縁性があるといえます。

さて、次は言語学の基本原理です。言語による表現においては、伝達の素材となる音声形式と意味の間には、有縁性がないこと（恣意性）が原理だとされています。これが現代構造主義言語学の祖ノ

シュールの立場です。音声形式／イヌ／と意味内容〈いぬ〉の間には、たしかに何の有縁性も認められません。幼児語では／ワンワン／と〈いぬ〉とが有縁に結びついていますが、これは言語体系においてはごくわずかの例外です。ソシュールはこの恣意性を原理とする言語の体系を記号と呼びます。では、有縁性にもとづく「もの・こと」による表現はなんと呼ばばよいでしょうか。ソシュールはこれを象徴として扱っているようです。

わたしは、とりあえずソシュールの記号（言語）と象徴の区別を尊重したいと思います。十字架はキリスト教の象徴、ひたいの汗は尊い労働の象徴というわけです。

記号（言語）表現の二重性について考えます。こちらは、ソシュールを下敷きにしなが、バルトやエーコラ記号論者が関心を寄せた問題です。

よい例がありました。

それから十年ちかい年月がすぎました。

ユミ子は、おとうさんの顔をおぼえていません。でも、……

を思い出してください。「おとうさんの顔をおぼえていません」は、文字どおりには「顔をおぼえていない」ことを表現していますが、文脈の上では「父親の戦死」を、十中八九示唆しています。「顔をおぼえていない」は直接表現（デノテーション denotation）、「父親の戦死」は間接表現（コノテーション connotation）と、バルトらの記号論では区別します。

この遠まわしの含意にみちた言い方（コノテーション）は、文学のなかだけではなく、日常のコミュニケーションにおいても、頻繁になされており、語用論の格好の対象となっています。友人宅を訪れたわたしが、「あつね、のどがかわくね。」などとやったら、間違いなくビールが出てくるでしょう。

「今年のサンタさん、ゲーム機持ってきてくれないかな。」

子どもでも言いそうですね。上目づかいに、遠慮がちに言われると、パパサンタには届かなくても、隣で聞いていたババサンタなら、枕元にこっそり置くかもしれません。

文学におけるコノテーションは、主に隠喩や換喩などの言葉の彩（あや）が担います。こちらは、近年、勢いを取りもどしてきた修辞論（レトリック）が熱心に議論しています。さらには、認知言語学などという動きもあり、にぎやかです。比喩については、いずれ検討しましょう。

わたしは文学において、あからさまな比喩には依らないコノテーションを象徴と呼ぶべきだと、いまのところ考えています。前回、小田切氏の言を借りて「文学は言語による形象的表現」だと言いました。言語が描く形象は実在の「もの・こと」ではありませんが、たくみな描写であれば、読者のイメージには、あざやかに『もの・こと』として焼きつくでしょう。大前提で述べたように、この『もの・こと』も必ず何かを表現します。すなわち何かを象徴します。

読み取りにおいて重要なのは、作品の中にしかけられている説明不足がもたらす象徴表現です。（読者論なら、すかさず「空所」と言うかもしれません。わたしはその語を使いませんが。）例にもどりましょう。「ユミ子は、おとうさんの顔をおぼえていません。」の後に、「おとうさんは、あの戦争で死んでしまったのです。」と書かれていれば、「顔をおぼえていない」ことの象徴性は問題になりません。「象徴表現を生む説明不足には、読み手に不足を補わせるために、省略、反復、誇張などの「しかけ」が

配される」などといっても、同語反復に過ぎないような気もしますが、今のところはこうしておきましょう。

この足りないところを補うためには、コンテキスト context (文脈)との重ね合わせが必要です。コンテキストという用語は①テキストの前後関係として使われる場合と②テキストの背景という意味で使われる場合があります。文学でのコンテキストはその両方です。①を明示的なコンテキスト、②を背景としてのコンテキストとわたしは呼ぶことにしています。先の文例では、「十年」ほどたったことは直前の文が明示的に示しています。父親が召集され、父娘が別れたことも書かれています。しかし、すでに戦争が終っていることは、明示的には語られていません。これは背景としてのコンテキストです。これを、今に重ねると、召集され、終戦となり、十年が過ぎても、子どもが父親の顔を覚えていないということであれば、父親は戦死したに違いないとなるでしょう。これが文学における形象による象徴的表現であり、その読み取りの一例です。

余談

この作品がすぐれているのは、ユミ子に「一つだけ」とねだらせておいて、父親にはこれに応じるかたちで「一つだけ」持ってこさせ、メッセージを託させるという語りをやっていることでしょうか。ほんとうにスゴいですね。ところで、作家本人の回想によると、モチーフの「一つだけちょうだい」は実際にお子さんがある時覚えたことばだったそうです。これと戦時中の召集された人の見送り風景とが重なって、作品が構想されたようです。コスモスが咲いている家も、復員し、上京した作家の眼に印象深く映ったのだそうです。そうですよね。いかにめぐまれた才能でも、無から有を生むという訳ではないのでしょうかね。

(付記) 本稿の作成にあたって、筆者の悪文・悪筆を判読し、ワードに浄書してくれたことも発達学科2年の鎌田陽奈さんに感謝します。

文献

ソシュール (小林英夫訳) 1940年, 1972年 (改版) 『一般言語学講義』 (岩波書店)

バルト (渡辺淳・林晃一訳) 1971年 『零度のエクリチュール』 (みすず書房)

エーコ (谷口勇訳) 1996年 『記号論と言語哲学』 (国文社)